遙(はる)けきかな……

日名子太郎

大学時代の敬愛する恩師M教授から「君、保育の世界に入って何年になるネ？」と突然たずねられたことがあった。その頃、私は、丁度、老学生として十数年も年の若い同級生たちと共に心理学を学びつつあった。つまり、保育の世界に入って僅か六、七年後で、M先生から、ヒヨコ扱いされたわけである。それから二十年余の時が流れ、教授引退パーティーの席上で再び先生から全く同じ質問をされた。私のやっと二十七年目になったという答えをきかれるや、先生は、「はア、やっと半分だネ」とつぶやかれるのを聞いて、「先生は、前にも同じことを質ねられましたが、何故ですか？」と反問すると、「君ね、人生、どんな人でも五十年同じ道をしっかり歩けば、何とか一人前になれるよ、五十年ネ……」

ところで、現在の私は、保育界でやっと三十五年を経たばかりで、先生のいわれる五十年にはあと十五年あるわけだが、そこではたと気が付いた。この五十年という目標を達成するには、まず長生きをしない限り不可能という事実である。幸い、日本人男子の平均寿命は、七十五歳とかいわれるようになったが、これには個人差もあり、第一そこまで生きられるかどうかわからないし、仮りにその平均寿命に無事達したとして、それだけで満願成就というわけではない。その間、ただ生きているのではなく、それなりの道を歩むことが必要なのだから決して容易なことではない。

一昨年、初孫の男の子、そして昨年末に二番目の孫の女の子が生れ、人並にじじいになり、老妻ともども毎日、孫たちの実に精力的な生命力あふれる姿に接していると、保育とは何か、いかにあるべきかという年来の課題を今さらに、改めて考えさせられる。特に、二番目の孫の出産に際して、母親の約一週間余りの不在が、生後一年十ヵ月の孫にとって、彼の人生初の大変な経験であり、その間の彼の様子を間のあたり見ながら実際に保育してみると、親の一方的な都合ばかりで軽々しく施設保育を論じることへの疑問を前よりも一層つのらせ、これまた、施設保育のあり方について考えさせられることになった。

もし、目標年数満願成就の頃まで無事であれば、この孫たちが、中学校を卒業するわけだが、その頃には、老人など生きていない方がよかったと思うような姿に変っているかも知れないし、そうでないかも知れない。

最近のエレクトロニクス技術の急速な発展は、本当に秒刻みで行なわれており、それが一体、人間の成長・発達や社会構造の変化にどのような影響を与えるかはその道の専門家といえども予断を許さないものがある。この辺に、今日の若い夫婦が子どもを生まない理由の一つとしての「将来へのなんとはなしの不安感」の源があるように思う。このような先行不安に原因する出生児数の減少は、推計能力の範ちゅうを超えていたからこそ予測できなかったのであろう。

私は、保育学とは、未来学の一種であり、今、乳幼児を保育するということは、彼らの将来生きていくべき世界を予測しつつ、判断し、体系化していかなければならないものと思っている。その為には、コメニウスやポルトマンの述べているように、人間は何故、胎児期が短かくすべて早産ともいえる状態で生まれなければならないのか、また何故乳幼児期があのように頼りなく幼なくなければならないのか、そして成人するまでなんで長い期間を必要とするのかという点に目を向け、それがすべて他の動物とは異なる実に複雑な生活への適応を迫られるからであるということの認識が大切である。

この認識あって始めて現在只今の保育に処することができるということのわかるには、やはり五十年は必要のようである。因みに、初孫の名前は「遙（はるか）」という。

（玉川大学）